

# 大学運動部活動における「イングループ」と「アウトグループ」に 影響を及ぼす要因に関する研究

スポーツ経営組織学ゼミナール 1215005 油田 陸斗

## 1. 研究動機・研究目的

多くの人々にとってリーダーシップとは身近なものである。Yukl(1998)は、「リーダーシップとは、意図を持った影響力が、ある人によって他の人々に対し行使されるプロセスを含むということであり、この影響力は集団ないし、組織の活動や関係を築き、構造化し、促進しようとするものである」と述べている。石川(2006)は、これまでトップ・マネジメントや現場の管理者のリーダーシップが、組織業績や従業員のモチベーション・職務満足と結びつけて論じられており、教育研修においてもリーダーシップ開発に焦点を当てたプログラムが開発されている。また、研究面においても、様々なリーダーシップは開発されてきたと述べている。その中で、LMX理論がある。LMX理論とは、リーダーとフォロワーの交換関係に着目し、リーダーシップが有効に発揮されるかどうかは、リーダーがフォロワーと良好な交換関係を築くことができるかどうかによると考える。従来のアプローチが、主としてリーダーそのものに焦点を当てているのに対して、LMX理論は、リーダーとフォロワーの個別の関係に焦点を当て、組織全体へのリーダーシップの影響を個別の関係の集合体としてとらえている。

先行研究によると、西澤(2010)は、このLMX理論を基にアルバイト店員に調査を行い、組織には内集団(イングループ)と外集団(アウトグループ)が存在し、内集団は職務満足度が高い。反対に外集団は職務満足度が低く、転・離職を考える割合が高いと述べている。つまり、内集団と外集団には少なからず差があると言える。これは、スポーツに当てはめても同じであると考えられる。

日本の部活動の指導方法は、長い間変化の兆しが見えず、現在も部活の主導権を指導者がけん引するトップダウン方式が多い。実際に、選手たちの限界意識を打ち破らせるために、敢えて理不尽な要求を課すなど、反則タックル問題が浮上した日大アメフト部などは、明らかにその典型であった。

大学運動部活動ではこれまで所属してきたチームのレベルや選手個々の立場が異なる選手が内在しており、監督と選手の関わり方は多種多様であると考えられる。コミュニケーションをとる上で、リーダーがどのように考え、行動していたとしても、フォロワーがどのように受け取るのが大切であり、フォロワーを理解することは、組織にもいい影響を与え、組織運営をしていく上で非常に重要である。

そこで、本研究では、リーダーとフォロワーとの関係に着目した「LMX理論」を基に、「イングループ」と「アウトグループ」に影響を及ぼす要因を、フォロワー(受け取る側)からの視点から、大学運動部活動(団体・個人)を対象として明らかにする。

## 2. 研究方法

[調査対象]

団体競技(男子バレーボール部)と個人競技(水泳部)に属している学生と指導者(n=57)

[調査期間]

2018年10月上旬から下旬

[調査方法]

半構造化インタビュー

[分析方法]

KJ法によるグループ編成

## 3. 主な結果と考察

本研究では、リーダーとフォロワーとの関係に着目した「LMX理論」を基に、「イングループ」と「アウトグループ」に影響を及ぼす要因を、大学運動部活動(団体競技・個人競技)を対象として明らかにすべく、調査を行った。その結果、①コミュニケーション②好環境③人間関係④監督の活動に対しての満足度の4つが「イングループ」と「アウトグループ」に影響を及ぼす要因であることが分かった。これら4つのラベルのうち、①コミュニケーションは「会話」「接点を持とうとしない」から形成され、②好環境は「話に行きやすい雰囲気」「部活が好き」「選手の部活動を頑張りたい意欲」「選手間のコミュニケーション」から形成され、③人間関係は、「相互承認」「選手ファースト」から形成され、④監督の活動に対しての満足度は、「信頼がない」「活動内の不満」「監督のネガティブな行動」から形成された。以上の4つの要因は、単に「イングループ」と「アウトグループ」を分類するだけのものではなく、選手の満足度やモチベーションにも関連すると考えられる。もちろん、指導者が選手より立場が上であることは紛れもない事実であるが、本研究の中でも指導者が選手と同じ目線になって指導することの重要性は示唆されている。選手を理解し、尊重することや、的確なタイミングでの的確な声掛け・コミュニケーションをとることは、監督と選手の信頼関係築くためには必要不可欠である。

## 4. 結論

大学運動部活動(団体競技・個人競技)における「イングループ」と「アウトグループ」に影響を及ぼす要因は、①コミュニケーション、②好環境、③人間関係、④監督の活動に対しての満足度である。

## 5. 卒業論文の執筆を終えて

本論文を執筆するにあたり、水野基樹先生をはじめ、多くの方々のご指導ならびにご支援を賜り、誠に感謝申し上げます。また、インタビュー調査にご協力いただきました、57名の方々にも御礼申し上げます。お力添えを頂きました皆様、本当にありがとうございました。